

朱雀天皇事記史料百九

十四下

和書門		消印	一九九三	函架	類
四〇九	冊				

庫文閣内		和書類
二〇一	函架	
四〇九	冊架	九三號

(五一一才)

書刊史  
三七號

内閣文庫	
番號	和 93
冊數	409(115)
函號	141 131



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





史料卷之百九

庚辰年六月二十四日

七月六日

北國記行雨本卷事

日本紀略云七月九日

十五日

日本紀略云十五日

諸國之神可祈年豐也



史料卷之百九

和學講談所

朱雀天皇事記第十四下起天慶六年七月

七月大丁丑朔

高野宮

配祈雨奉幣事

内閣

本紀畧云七月九日奉幣十一社祈雨也

十五日辛卯令諸國祈年穀事

日本紀畧云十五日辛卯官符于五畿七道

諸國名神可祈年穀也



廿六日壬寅陽成皇子元良親王薨事

日本紀畧云廿六日兵部卿三品元良親王

薨按小右記引清慎公記為廿七日

帝王編年記云元良親王母遠長女三品兵

部卿天慶六年七月薨年五十四

尊身分脈陽成皇子元良親王母主殿頭藤

遠長女三品兵部卿天慶六七廿六薨五十

四歳頓死

貫之實事延長七年十月十日女八宮條子やうせい院

力一ぬみこの軍賀はつう海つう時を屏風

内裏ふそくうせきせ給ふね不とふあはつう

海つふ久しくも白りんそそや梅のむまくと

わひてりもせれそあふふあ

大和物語を志のたふそえのみらにいつくはるふ

雨とあま初々ああといとわのしつうはるる

く時おとく海へ今うつとあのをとくむら



海へ行くふちのけり女も色紙を繕ふ時  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

又さき番は海へ行く承香屋の田舎可成り  
一中納言のあつちのあつちのあつち  
それとあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつちのあつちのあつち











那をいふ事ある人を知る也

今昔物語云今ハ昔陽成院ノ御子ニ元良  
親王ト申ス人御座リケ極キ好色テ有ハケレ  
世ニ有ル女ノ羨慕也ト聞ユル會ニタル未  
タ不<sub>レ</sub>會モ文ヲ遣<sub>ル</sub>以テ業ケト<sub>レ</sub>而<sub>ル</sub>間其  
ノ時ニ批把ノ左大臣ノ御許ニ童ニ仕ヒ  
給<sub>ル</sub>ヒケ若キ者有<sub>ル</sub>ケ名ハ岩揚ソト云<sub>ル</sub>ケ形千  
有様羨慕ノ心モハハ可咲<sub>レ</sub>カリケ万ノ人此

ヲ<sub>レ</sub>聞テ<sub>レ</sub>懃ニ云ハセケ心堅テクニ不聞<sub>ル</sub>ケ程  
ニハト云人強ニ心ヲ盡テ<sub>レ</sub>假借<sub>レ</sub>ハケ難  
辞<sub>テ</sub>クニ會<sub>リ</sub>ニケ其後ハ男難去ク思<sub>テ</sub>大臣  
ノ家ノ局ニ來通<sub>ル</sub>ヒケ彼ノ元良親王此ヲ<sub>レ</sub>  
不知<sub>テ</sub>ニ彼ノ女ノ羨慕<sub>ル</sub>由ヲ聞キ<sub>レ</sub>耽<sub>テ</sub>度  
度云<sub>ル</sub>ハセケ男有<sub>ハ</sub>ト不<sub>レ</sub>云<sub>テ</sub>ニ強顔<sub>テ</sub>返<sub>タ</sub>ヲ  
ニ不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>リハケ親王此<sub>ハ</sub>ト云遣<sub>リ</sub>給<sub>ル</sub>ヒケヲホ  
ソ<sub>ウ</sub>ニニメユフヨリモハカ<sub>ナ</sub>キハツレ



十キ人ヲタノムナリケリト女ノ返ニイ  
ハセ山ヨノヒトコトニヨフコトリヨハ  
フトキケハミミハナシ又カト十ム此ノ  
親王遂ニ會モリト不聞<sub>エスト</sub>  
元良親王兼之西宮北西妹おる并れ大納言此  
水乃<sub>こ</sub>こ<sub>て</sub>ね<sub>て</sub>〜<sub>ら</sub>と<sub>し</sub>と<sub>思</sub>ひ<sub>て</sub>よ<sub>う</sub>を  
あ<sub>ら</sub>ひ<sub>く</sub>ると<sub>水</sub>方<sub>何</sub>を<sub>海</sub>母<sub>と</sub>か<sub>ら</sub>海<sub>上</sub>たら  
て<sub>あ</sub>ら<sub>は</sub>る<sub>る</sub>ふ<sub>あ</sub>る<sub>と</sub>ね<sub>と</sub>さ<sub>ら</sub>に<sub>水</sub>方

うを<sub>給</sub>ひ<sub>か</sub>れ<sub>西</sub>平<sub>九</sub>日<sub>給</sub>ま<sub>ら</sub>ふ<sub>白</sub>ひ<sub>と</sub>  
く<sub>こ</sub>ふ<sub>津</sub>く<sub>り</sub>を<sub>た</sub>つ<sub>と</sub>入<sub>る</sub>見<sub>る</sub>経<sub>を</sub>さ<sub>き</sub>  
せ<sub>し</sub>道<sub>り</sub>給<sub>ふ</sub>ま<sub>ら</sub>ひ<sub>き</sub>ふ<sub>と</sub>う<sub>は</sub>は<sub>ら</sub>ふ  
ふ<sub>ら</sub>や<sub>あ</sub>ら<sub>し</sub>の<sub>ふ</sub>こ<sub>ら</sub>に<sub>あ</sub>ら<sub>は</sub>し<sub>つ</sub>  
は<sub>ら</sub>ひ<sub>し</sub>と<sub>も</sub>

又<sub>き</sub>原<sub>極</sub>力<sub>の</sub>ま<sub>ら</sub>し<sub>と</sub>子<sub>子</sub>  
ふ<sub>ら</sub>ふ<sub>け</sub>け<sub>ら</sub>〜<sub>と</sub>給<sub>ふ</sub>て<sub>九</sub>月<sub>九</sub>日<sub>給</sub>ま<sub>ら</sub>ふ<sub>白</sub>ひ<sub>と</sub>  
世<sub>の</sub>あ<sub>ら</sub>し<sub>の</sub>ま<sub>ら</sub>し<sub>と</sub>〜<sub>と</sub>給<sub>ふ</sub>て<sub>九</sub>月<sub>九</sub>日<sub>給</sub>ま<sub>ら</sub>ふ<sub>白</sub>ひ<sub>と</sub>



ふさふさうらうらうとせしめしやう海いふよのうらうらうと  
二季ふふふ見ふも今日ふへーなりのめあつて  
御息所をきこへーかゝれん子見せぬー  
あゝ〜も程ふくと海なれぬと〜してきては  
京都御息所よつとぬもふふ〜ある〜難波  
ありも〜とつら〜てもはら〜して〜思ふ  
又さうおも弁りたゑよあひほをぬは〜あ〜  
わ〜海ならて〜のふへふふ〜入ら〜も

ものつゝあ〜〜あ〜のなか〜と  
けさ〜〜路ふふ女と雲とさふ〜のうら〜と  
あゝもさ〜な〜〜〜のふ〜と  
あひほひて後宮さ〜も〜もをさ〜細り  
ゆ〜もさ〜〜〜と〜又な〜  
このさ〜〜稻荷の母あ〜〜あひほひて〜  
さうほ〜ぬを女さ〜りな〜か〜あ〜めえ  
をねぬ〜玉れや〜海〜人さ〜な〜つ。



かゝるついでに、おのれがたまたまあつたあひふ  
つりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
みま井はあつては、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
死伊り、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
又を頼義のつりたぬあつては、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ

奉り給ひたつて、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
又を頼義のつりたぬあつては、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
女たつて、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
又を頼義のつりたぬあつては、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ  
又を頼義のつりたぬあつては、おのれがたまたまあつたあひ  
ふつりやう宮埋木の下にかけ、名取川さひ  
しと瀬よみあつてもれぬへ

兵衛

後撰



又きこほ介あ中興の死う娘ももかゝらうく心たう  
—と史記ひてはく—も終終の葉のまら  
くもいそを恨つる風もつらつてつてさうくと  
後撰集をももら—はみこゑ昔胡長れいよあ  
まよとゆらうあははまはあ—あとの後まふ  
らうをまひかまじいそあも事もゆ—てあうら  
—はまやう—は枝よつはえあうまうじに  
ま—と道ゆりもたを—より—はみこゑの

分不首あつふえ—人あはま—と—は  
はひ—章終

又まあ不けああまの—と—は  
—と—は  
ま—と—は  
は—と—は  
ま—と—は  
は—と—は  
ま—と—は  
は—と—は



拾遺集云良女に承考殿のこころにまは  
つまは海をこころひ侍り侍らばあふたのこころ  
侍りといふたれいなりしはま様をまじはる  
しよあ侍り侍らばあふたのこころにまは  
あふたのこころにまは  
又云良女のみこころにまはあふたのこころに  
女れい侍らばあふたのこころにまは  
あふたのこころにまは

後御草子多御の侍り及多御殿をまじ  
のらば名はあふたのこころにまは  
元良親王云々の奏賀は侍らばあふたのこころに  
にく大極殿より多御の侍り及多御殿をまじ  
く一孝部王の紀は侍らばあふたのこころに

廿七日 癸卯 相撲召合事

日本紀畧云廿七日癸卯於紫宸殿相撲召

合有樂



西宮記相撲條裏書云天慶六年七月廿七日從四位下左衛門權佐平隨時等出居但左兵衛佐等有障以侍從賴忠為代官

北山抄云天慶六年左兵衛佐不參以侍從賴忠為代官貞觀七年例也

小右記云九條右丞相師輔天慶六年七月廿七日記云內豎等參上羞饌於王卿但候簾前大將衝襲近衛少將羞之酒番侍從勸盃親

王貫主親王式明執盃云件巡可至於大將所

歎彼此答云慥不悟先例但此巡唯下而至

于候簾前上卿近衛次將勸盃其巡下時親

王進上卿後受盃還本座云二

廿八日甲辰拔出追相撲事

日本紀畧云廿八日甲辰追相撲

小野宮年中行事云天慶六年七月廿八日

拔出云二殿上中將等出自簾中給熟瓜如



例出云引錄上中諸書史自卷中錄第九

小右記云天慶六年七月廿七日故殿御記

云元良親王薨同日相撲召合廿八日拔出

有樂依非御傍親有音樂歟

舞樂要錄云天慶六年拔出七月廿八日左蘓合

万歳樂散手太平樂陵王雜藝右古鳥蘓綾

切貴德酣醉樂拍犬乞寒

八月小丁未朔

一日丁未釋奠事

西宮記裏書云或記云天慶六年八月一日

釋奠納言等有障不參參議保平在衛等著

寮行事

北山抄云天慶六年八月一日釋奠依明日

伊勢奉幣事諸衛并本寮三牲以魚代可令

進之由右大將仰外記公忠實類按又見江家次第

行幸召仰事



西宮記裏書云或記云大約言實賴卿參內

召仰明日八省行幸事是依臨時奉幣也

二日戊申依太宰府四王寺怪異奉幣伊勢事

日本紀畧云八月二日戊申天皇幸八省院

奉幣伊勢太神宮依祈太宰府四王寺仙像

堂舍鳴響也

按西宮記裏書為  
停行幸未知孰是

依廢務停釋奠內論議事

西宮記裏書云或記云二日戊申依臨時奉

幣事廢務行幸當日停止明經博士參入然

而依廢務不召御前又不賜祿云

北山抄內論議條云天慶六年明經博士參

入依廢務不召之又不給祿不見

八日甲寅賜史生奈癸元護為太政大臣書寫佛

經間上日事

類聚符宣抄云史生奈癸元護右大納言藤

原師輔卿宣件元護從去四月五日至手五



月廿九日并五十四箇日間候太政大臣家  
奉寫大般若金光明經等宜准見仕給上日  
者天慶六年八月八日大外記兼近江權少  
掾三統宿祢公忠奉  
十日丙辰中務式部兩省依官人不具不申季祿  
目錄事  
免左史生大海保平等急給俸料事  
文在九月二日

類聚符宣抄云大納言右大將藤原卿宣左  
史生大海保平右史生百濟玄來使部高篠  
清蔭等不給俸新多經日月宜警將來殊可  
勘免之由仰辨官已了同知此由請印俸新  
符者天慶六年八月十日大外記兼近江權  
少掾三統宿祢公忠奉  
十一日丁巳定考停音樂事  
政事要略定考條云天慶六年依皇太后御

穩子



藥支音樂停止依同三年例所行也中納言

十元方為日上也

廿二日戊辰重令太宰府注進管內神名帳事

高良社文書天慶七年筑後國解文云被太

政官去年八月廿二日符今年二月廿三日

到來備檢事意件神名帳造進既有其期况

太政官去年九月下彼府符備管國嶋神名

帳悉以朽損難可據勘宜仰管國嶋早令注

進者而于今不進府之緩急責而有餘大納

言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察

使藤原朝臣實賴宣奉勅宜仰彼府神名本

位愷以勘錄令言上之旨府宜承知依宣行

之者

廿六日壬申光孝天皇國忌事

清慎公記云八月廿五日著外記云二政了

著侍從所右中辨師尹朝臣權右少辨俊朝



臣少納言泉朝臣朝望朝臣著着了後外記  
文正走出申明日國忌上少納言皆稱障右  
衛門督高明諾舊例申文了史退出之後超替出  
申之但今日無申文須供盤之後未立筋之  
前可申歟

九月六

丙子朔

二日丁丑拘中務式部兩省季祿事

類聚符宣抄云中納言藤原元方卿宣中務

百九之十六

式部兩省依官人不具去八月十日不申諸  
司當年秋冬季祿目錄須任先例令進過狀  
然而此般許殊從寬宥宜除彼兩省之外自  
餘諸司請印其季祿符者天慶六年九月二  
日大外記兼近江權少掾三統宿祢公忠奉  
十日酉乙行幸召仰事

西宮抄例幣條云天慶六年九月十日上卿  
衆陣可有明日行幸之由奉仰令外記召仰



諸衛

按撰集秘記同之

十五日庚寅牽上野并武藏秩父御馬事

西宮記裏書云天慶六年九月十五日御南

殿覽上野秩父御馬顯忠卿候御前先取上

野次取秩父御馬十七日給左右寮秩父御

馬二匹太政大臣又給上野村上太守一疋

政事要略云天慶六年九月十五日上野御

馬廿疋秩父御馬廿疋於南殿御覽中納言

顯忠候御前先覽上野擇取如常覽秩父如

前同十七日以左右馬寮秩父御馬二匹給

大相國并上野太守各一疋

十六日辛卯內宮遷宮依穢延引事

日本紀畧云應和二年八月廿二日丁未宮

中觸穢仍立札於陣伊勢太神宮遷宮事依

穢延日之例大外記傳說勅申天慶六年太

神宮遷宮同八年豐受宮廷宮例按又見西宮記裏書



太神宮例文云天慶六年癸卯內宮遷宮朱雀院御

自延長二年及廿年

廿二日丁酉奉幣依穢儀延引事

北山抄云天慶六年九月廿二日依禁中穢

上卿著侍從所宣命帛申大相府依重服人

在家中不被奉仍差外記令申左大臣家依

同度不被奉之又令申殿可用白紙者此間

依觸穢人著侍從所停止已了

是月日本紀講竟事

文在十二月廿四日

十月小丙午朔

十日丙午旬事

西宮記裏書云天慶六年十月一日旬云二

了右大將實賴卿語仰云旬日給扇時內侍

持之出御屏風下出居次將進取頰置臺盤

六上云二



六日<sup>辛</sup>神位記請印事

北山抄云天慶六年十六師輔卿內印次請

印神位記

西十一月大<sup>乙亥朔</sup>

十八日<sup>壬辰</sup>新嘗會事

政事要畧引吏部王記云天慶六年十一月

十八日新嘗會群臣座定內辨右大將實賴

是卿奏大納言師輔卿有所勞不候列由召之

百九之十九

先例或三獻後奏後參者而未供御膳奏之

大早也

西宮記裏書云天慶七年正月七日大納言

師輔仰云有雜急大夫等依例不可預見祭

但賜任符未向任國司先例如何公忠申云

去年新嘗會如此之輩申內辨大納言大納

言仰云至于此度殊許之至以後未必可許

女者云二



廿三日丁酉賀茂臨時祭事

西宮記裏書云天慶六年十一月廿三日臨  
時祭云二右中將師氏右少將義方等朝臣  
持重盞勸陪從使等云三有召王卿候御前  
及求子舞右大將降將行酒盞立陪從列還  
候殿上御厨子所供御酒上野親王村上供之公  
忠朝臣執銚子御盃給式部卿親王敦實親王受  
盃復本座召土器寫酒返御盃了飲之置器

百九之廿

座側降西階舞蹈左旋而後南橋復座乃流  
其巡云二式部卿親王被聽昇殿  
政事要畧引吏部王記云天慶六年十一月  
廿三日賀茂臨時祭及于賜揮頭式部卿上  
野太守不動座重明余即給使料使等起坐式部  
卿親王稱例休長橋南侍臣座諸王卿同候之  
湏吏有召陪殿上及求子舞進右大將降殿  
賜酒舞人半脫袖進舞誤起雌狗義方朝臣就邊



喻正之奉勅大將行酒次暫立陪從列有頃  
還候殿上御厨子所進御酒云二示之式部  
卿親王親王陳非殿上人難先供即催上野  
親王供之次式部卿供之使等退復有曲宴  
事令供第三御觴招近江守公忠朝臣執鉞  
語云先例第一親王或給御盃前度式部卿  
供時無此事頗冷淡此度供次以可候氣色  
公忠云二献已上例無此夏乎予即供進之

次公忠候天氣上御坏式部卿余即端笏而  
退親王受御坏復本座召土器寫酒返御盞  
了飲之置器座側降西階舞蹈左旋而退從  
南橋復座乃流其巡臨昏式部卿起見風有  
令暫候之勅即起座傳仰扶親王進升殿之  
間藏人頭左中將師氏朝臣來告式部卿被  
聽升殿由彼親王奏慶之間依醉不候  
廿九日癸卯石清水臨時祭依穢延引事



西宮記引吏部王記云天慶六年十一月廿  
九日石清水祭使等皆給裝束奉仕御襖欲  
發笛歌之間忽有觸穢乃止神事云二十二  
月十九日可奏云二  
宮寺緣事抄云石清水臨時祭延引天慶六  
年十一月廿九日癸卯可有石清水祭事仍  
使舞人陪從皆給裝束奉仕御襖欲發歌笛  
之間從太政官右少辨曹司犬產穢通內裏

百九之廿二

仍停止神事云二吏部記

十二月小乙巳朔

八日壬子成明親王任太宰帥事

日本紀畧云村上天皇諱成明天慶三年二

月十五日辛亥加元服叙三品同五年十二

月十三日任上野太守同六年十二月八日

任太宰帥

按皇年代略記為六日一  
代要記大鏡裏書同本書

十二日丙辰奉幣事



北山抄云十二月十二日不穢上卿源中納言一人也而稱病不參彼遂不參依仁和例觸穢上卿可行者宣命帝自陽成院可被奉之由召仰別當元置了源中納言參入十三日巳定荷前使事

北山抄定荷前使條云御物忌時下給差文於外記以後日奏之見天慶六年私記

廿四日辰日本紀竟宴事

百九之廿三

日本紀畧云十二月廿四日戌辰於宜陽殿有日本紀竟宴

日本紀竟宴和歌日本紀竟宴各分史得王仁一首并序從五位下行大內記兼近江權少掾攝朝臣直幹原夫有國有家之后先設記言記事之官所以知万代之規模察百王之号令者也是用元正天皇御宇之時勅一品舍人親王從四位下大朝臣安麻呂等俾



撰日本書紀上起混沌下別人神始於辛酉  
之元終於壬寅之歲摠三十卷勒為一家自  
彼天孫排雲衢八重之路仙蹕降日向千穗  
之峰神倭臨曲浦而逢漁人靈鳥指中洲而  
為鄉導洎于持統禪讓之際傳以洪基文武  
謳歌之初受其曆數乃是四十二帝之興衰  
者纖微必錄一千餘年之治亂者旨要無遺  
寔著述之菁華為皇王之炳戒由斯弘仁承

百九之廿四

和之朝元慶陽成延喜醍醐之世重開講席累叩疑關  
聖上纂統天下無為扶桑之域歸仁細柳之  
鄉慕化超周郁二邁舜魏二運屬時休思講  
國典故承平六年之冬令阿州別駕田大夫公望  
說之大夫桂苑甲科蘭臺高第網羅百氏尋  
其廣則雲夢鄧林之飛志不逃苞括群流論  
其深則三江五湖之波濤盡入內深提撕之  
慈訓外受敦誨於先師即應絲綸始披講授



藻鏡懸鑒光澄宇宙之間華鐘待撞響徹雲  
霞之表天慶二年季冬之末東西邊州風塵  
不靜干戈之備嚴肅講誦之音寂寥俄而盪  
滅二兇將門純友澄清四海寰區寧謐禮樂復興尋以  
講之其禮如故中間別駕累遷美州紀州六  
年九月傳授始畢至其十二月二十四日聊  
仍舊貫之儀以行澆章之禮于時王公大夫  
碩儒博學鸛鸞接翼朱紫成群宛然茅洞之

百九之廿五

春遊髣髴蓬壺之夜宴鳴琴緩鼓別鶴啼鳥  
之曲欲終羽爵頻飛中山上若之流無數請  
分舊史各詠新歌扇遂古之餘風續先朝之  
故事其詞曰和多津見野千倍野肆羅奈身  
吳古江天浩曾八嶋乃國仁布箕波都太不禮  
下作者三十六人  
歌四十首略之  
廿七日辛未大納言師輔一人聽政事  
清慎公記云十二月廿七日參內大納言師



輔卿參議在衡朝臣參入大納言云今日宰  
相不參然而歲末之比外記之政頻以闕怠  
甚以不善仍依舊例獨身聽政云二有内印  
是月荷前事

北山抄荷前條云雨儀内豎大舍人等昇八  
足立長樂門前使長次官昇之經左掖門前  
立春興殿西廂北砌上退立左掖門内北掖  
侍從内舍人立門外御拜了昇案退出兼手者重

百九之廿六

昇之天慶六年例參入時次官  
内豎昇之至春興殿南云二

政事要略荷前條云使公卿以下一一起座

列立於承明門外藏寮置列幣物於其間使

等於承明門天慶六年參議以上巽角壇上  
於長樂門外昇之

長官次官相對一二昇其案東進入自長樂

門經左掖門前春興殿乾角膝行樹案於薦

上抽笏而退歸

是年神事以前行臨時御讀經事



北山抄臨時御讀經條云春日園韓神祭以前修例天慶六年

建延曆寺大日院置十禪師事

扶桑畧記云建延曆寺大日院置十禪師日月

可尋

東寺長者貞崇上辭表事

又云少僧都貞宗上表

作者文時

右貞宗去昌泰

二年謝東寺廿僧依有本願籠金峰山之邊

百九之廿七

結構一新草堂三十餘年更絕出山之思一  
生之間欲遂卧雲之志而延長五年頻蒙恩  
詔俄候禁闈厥後于今十七个年勵朽邁之  
愚性奉二代明時偏忘煙霞之舊栖忝沐雨  
露之厚恩况乎无為之化自及不次之賞頻  
降歡娛有餘還耻肥雁之貌涯分已溢如何  
腐螺之身於是齒是八旬命期一夕身目漸  
失視聽之勤手足且亡舉動之便雖報壯日



之昔心不堪暮年之老力望請殊蒙慈恩罷  
歸本山將送餘喘若留露命於草庵過霜資  
於松岫則拭一心之觀月而遙添金輪之曉  
光迴六時之念珠而彌祈玉宸之遐算貞宗  
誠惶誠恐謹言

按宗當作崇徵在  
明年七月廿三日

大學頭繁時卒事

尊身公脉藤原弘蔭男繁時母右衛門督高  
經女房子大學頭正五下伊勢備前肥後筑

百九之廿八

前日向等守天慶六年



史料卷之百九

阿倍就正書



史傳卷之九十四

漢書卷之九十四

漢書卷之九十四

漢書卷之九十四

漢書卷之九十四

大學語類卷之九十四

尊卑分殊亦原於陰陽時母方以門學而

徹古尚學若夫天賦五率下輝其備前肥後





